

# 東京立正短期大学 2026 年度入試過去問題

## 目 次

### 第 2 回一般選抜・一般選抜スカラシップチャレンジ <国語>

出典：原田宗典著／「おしゃべりの幸福」（「幸福らしきもの」所収）／（集英社文庫）

出典：熊沢 誠著／「若者が働くとき」／（ミネルヴァ書房）

### 第 3 回一般選抜・一般選抜スカラシップチャレンジ <国語>

出典：江國香織著／「奇妙な時間」（「物語のなかとそと」所収）／（朝日文庫）

出典：鶴見俊輔著／「記憶の中の老人」（「思い出袋」所収）／（岩波新書）

（著作物のホームページ掲載の許諾を得ています）

.....

※第 1 回一般選抜・一般選抜（スカラシップチャレンジ）の国語受験者がいなかったため、問題の掲出はありません。

東京立正短期大学

二〇二六年度

第二回 一般選抜・一般選抜（スカラシップチャレンジ）入学試験

## 国語問題用紙

- 一 監督者の指示があるまで本冊子を開かないこと。
- 二 試験開始後、本冊子は必要に応じて切り離して構わない。
- 三 解答用紙に受験番号、氏名を記入すること。  
(試験監督者の指示に従って記入すること)
- 四 試験終了後、解答用紙、問題冊子ともに提出すること。  
(商用利用・個人利用を問わず、入学者選抜問題の無断転載を禁ず)

## 一、次の文章を読み、後の問いに答えなさい。(34点)

そういえばぼくの父親というのは、おしゃべりが上手な人であった。

あつた、と過去形で述べているのは別に父親が亡くなったわけではなく、存命中であるが最近  
はまともにおしゃべりをしていないからである。どこの家庭でもそうなのかもしれないが、三十  
も半ばを過ぎた息子とその父親の関係というのは、何だか複雑なものである。父親の方は当然老  
いて、第一線を退いたりしているわけだが、息子の前では完全な老人としてふるまうことをいさ  
ぎよしとしない。一方息子の方は成長し切って、一人前の男として家庭を持ったりしているわけ  
だが、だからといって老いた父親の前で尊大にふるまうのは気がひける。(①)互いの間に、妙に  
遠慮した雰囲気漂う。それはちょっとした照れ臭さにも似ている。父親がもつと若く、息子が  
まだ少年で、同じ屋根の下で暮らしていた頃だったら、あけすけに言えた他愛もないことが、ど  
うにも口にはできなくなる。

特にぼくの家の場合、過去に父親との間に厄介な<sup>あつか</sup>か<sup>く</sup>しつがあつただけに、この複雑な関係が  
さらに複雑になっているような気もする。たまに父親の家を訪ねて、生憎母親が不在だったりし  
て、二人きりで向かい合ったりすると、すごく困る。

「最近どうだ」

と父親の方から気を遣って水を向けてきたとしても、

「うん。まあまあだよ」

てなことしか答える気にならない。ここで会話が途切れてしまうと、後はもう互いに居心地の  
悪い沈黙を持て余したまま、ずびずびお茶をすするばかりだつたりする。<sup>c</sup>傍から見ると馬鹿みた  
いな光景かもしれないが、どうしようもない。

その昔、ぼくがまだ半ズボン<sup>は</sup>を穿いた少年だつた頃は、父親と二人でいても、こんな間の悪い  
思いをしたことはなかった。父親は腕のいいセールスマンとして働き盛りであり、いつもあちこ  
ち飛び回っているために話題が豊富で、おしゃべりそのものも職業柄すごく上手だつた。

「そういえば昔おれがな……」

と父親がおしゃべりを始めると、ぼくはそれまで熱中していた遊びを中断してでも、耳を傾け  
たものである。

今思い返してみると、父親のおしゃべりにはきちんと起承転結が用意されていた。ぼんやりし  
ている聞き手の注意を促す話の発端があり、それを受けた展開があり、急転直下のオチがあつて、  
最後には大笑いできるような結末があつた。(②)そこにはちょっとした嘘や法螺<sup>ま</sup>が<sup>ほ</sup>らがないまぜにな  
っていたのだろうが、その匙加減<sup>さじ</sup>がなかなか絶妙だつたので、リアリティが損なわれることはな  
かつた。おそらく少年のぼくは、瞳<sup>ひとみ</sup>をきらきら輝かせて、父親の面白いおしゃべりに夢中で聞き  
入っていたはずである。そして父親は、そんなぼくを目の前にして、何とも言えない“おしゃべ  
りの幸福”を味わっていたのではなかつたらうか。

父親がもつとも得意としていたおしゃべりは、太平洋戦争末期から終戦直後にかけての体験談  
で、息子のぼくはこれを何度も何度も繰り返し聞かされた。普通、同じ話題を二度も三度も聞か  
されると、いくら子供とはいえ飽きてくるものだが、この時期の父親の体験談に関しては例外だ  
つた。父親は実に巧みに、そして毎回何らかの“おまけ”のエピソードを付け加えて、自らの青

春時代を愉快そうに語った。だからもう何度も聞いた話なのに、その度に目新しく感じた。改めて反芻してみると、どの話もよくできた一篇の短篇小説のようである。

例えば終戦直後に、弟と二人で闇屋をやっていた時の話。父親の話術を上手く再現できないのが悔しいが、筋だけを追うと大体こんな話である。

「……それでな、おれとマルちゃん（弟のアダ名）がリュックに一杯、山のように小豆を仕入れて東京へ売りに来たわけだ。さあどこで売ろうと思っていた矢先に、運の悪いことに手入れが入ってなあ。電車の中で。あれは中央線だったかな、刑事がどかどか乗り込んできて、でっかい荷物を持っている奴を片っぱしから調べ始めたんだ。当然、おれとマルちゃんも調べられて、中から小豆がわんさと出てきたから、闇屋だなんてなもんで連行されちゃったのよ。あれは中野の駅のすぐ近くの警察署だったかな。小部屋に通されて、ここで取調官が来るまで待つておれと言われたんだが、そいつがなかなか来ない。すごい数の闇屋が捕まってて、取調官も忙しかったんだらうなあ。その内にマルちゃんがな、窓の外を眺めていたんだが『兄貴、ちよつとあれを見てくれ』って言うんだよ。見たら、警察署の真ん前に乾物屋があつて、店を開けてたんだ。こりゃあいいやつてんで、まずおれがそつと小部屋を抜け出してだな、その店の主人に小豆を買ってくれるよう話をつけてきたわけだ。それでマルちゃんと交代しながら、小豆をポケットに入れて小部屋を抜け出しちゃあその店に運んだんだよ。二時間くらいして、やつと取調官が来た頃には、もう小豆はコップに一杯くらいしかなくなつてた。それを見た取調官はこう言つたよ。『何だ！ こんなちよつとの小豆で連行されたのか。悪かったね。早く帰りなさい』って。あはははは！」

この話は、少年時代から青年期にかけて、何度も何度も繰り返し父親から聞かされたのだが、いつも新鮮に感じられ、最後のオチの部分では声を合わせて笑ってしまうのが常であった。③そんな破天荒な青春を送った二十代の父親と、自分が同時代に生きることができたら、どんなにか楽しかったらうと思えてならなかった。

まあこうして活字にすると、大して面白くもない話に思われてしまうかもしれないが、父親の口で語られると、話自体が鮮やかな色彩を帯びてくるようであった。だから聞いていると、少年のぼくは何とも言えない幸福感を味わい、同時にそんなぼくを見ている父親も幸せを感じていたはずである。

おしゃべりの幸福。

そういう幸福があることを、ぼくはいつの間にか父親から教わつたような気がする。だからこそぼくは現在物書きとして、不特定多数の人たちに向けておしゃべりをし、物語る幸福の中に生きているのだと思う。

実はつい先日も、八ヶ岳でこの“おしゃべりの幸福”を再確認したばかりである。

現在ぼくには四歳と六歳の子供がいるが、二人とも親に似てか、お話を聞くのが大好きで、眠る前には必ずカミサンに絵本なり童話なりを読んで聞かせてもらっている。その様子を毎晩横目で眺めていたぼくは、ある日ちよつとした気まぐれを起こして、

「よーし。今夜は眠る前にお父さんがお話をしなすけよう。その場で一緒に作りながら先へ進むお話だぞう！」

なあんてことを言つてみた。これを聞くと子供たちは早速瞳を輝かせて、

「早くしろ早くしろ早くしろ！」

とせがんできた。思いつきで言ってみただけのぼくは、④何にも考えてなかったのだとした  
じとなり、

「夜まで待て夜まで」

と二人を制してから、ぼんやりとお話の筋を考え始めた。題名は「かな・なお・まあの大冒険」。  
佳苗と直弥、そして「まあ」というのは去年急死してしまった我が家の愛猫の名前である。この  
二人と一匹を主人公にして、八ヶ岳の森の奥を舞台に展開される大冒険のお話、ということだけ  
を決めて、ぼくは夜を待った。

「むかあしむかし、その昔ではなくて、つい最近の話です。佳苗ちゃんと直弥くんは、お父さん  
とお母さんと一緒に、八ヶ岳に来ていました……」

寝床に就いた二人の横に寝転がって、思いつきでお話を始めると、二人とも薄暗闇の中で真剣  
に聞き入っている気配がびんびん伝わってくる。自分が主人公になった話を聞くなんて、これが  
生まれて初めてのことだろうから、興奮するのも無理はない。ぼくは自分で言うのも何だが、さ  
すがに職業が小説家だけのことはあって、別に苦勞して考えなくても、話しながらどんどん先の  
筋が浮かんでくる。仮に話に詰まったとしても、

「さあ、その樹の陰から現れたのは……えーと、えーと、何でしょう!？」

と子供たちに問いかければ、

「アニがいい!」

とすぐに答えが返ってくる。この親子共同作業でお話を作っていく過程は、思いの外<sup>ほか</sup>楽しかつ  
た。まさに「おしゃべりの幸福」を味わ<sup>あ</sup>うしゅんかんそのものである。騙<sup>あや</sup>されたと思って、お宅  
でも試<sup>い</sup>されては如何でしょう。

〈原田宗典著「おしゃべりの幸福」(『幸福らしきもの』(集英社文庫)より)〉

問一 波線部a～eの、a「いぢぎよ(じ)」、b「かくじつ」、c「傍」、d「破天荒」、e「しゅんかん」を、漢  
字はひらがなに、ひらがなは漢字に書き改めなさい。(各2点、計10点)

問二 ①～④に入る言葉として最も適切なものを、ア～オより選択し、記号で答えなさい。  
※ ア～オのうち一つは使用しない。それ以外はすべて一度ずつ使用する。(各2点、計8点)

ア しかし    イ まだ    ウ だから    エ そして    オ もちろん

問三 筆者と父親が二人きりになると返ま<sup>へ</sup>すくなる理由を、二つ挙げなさい。(各3点、計6点)

問四 本文中で筆者は父親のおしゃべりを「一篇の短篇小説のようである」と述べている。この比喩  
が示す父親の話の特徴を、本文に即して説明しなさい(6点)。

問五 「おしゃべりの幸福」の意味として適切なものを選択し、記号で答えなさい。(4点)

ア たくさん話すことで相手より優位に立つ幸福  
イ 話すことにより生まれる心の満足や喜び  
ウ 他人の秘密を話してすこ<sup>すこ</sup>まりする幸福  
エ 長い時間をかけて議論する幸福

## 二、次の文章は『若者が働くとき ―「使い捨てられ」も「燃えつき」もせず―』（2006年・熊沢誠著）の一節である。文章を読んで、後の問いに答えなさい。（32点）

現時点の階層分化のプロセスとして決定的に重要なのは、今の非正規雇用者とは、たいていは正社員になる前の経過的存在であったかつての臨時工とは違って、総じていつまでも企業社会の外なる存在であるという事実です。企業は人件費の節約、雇用量の調整、単純労働の専担者確保のために、定年までの雇用や昇給やキャリア展開を保障しなくてもよい働き手として、さまざまな非正社員を「活用」しているのです。

これに関連して、グローバル経済下の「ニューエコノミー」のなか、企業の労働力需要が、一方では創造的な能力や専門的な知識をもった労働者、他方では（フリーターのような）代替可能な単純労働者と質的に二分化したため、前者に中核正社員、後者に非正規労働者を配置するようになったという認識があります（山田、二〇〇四年）。私は、若者の間に大きな「希望格差」が生まれているという山田の警告には一定の意義を認めますけれども、企業内の「身分」階層化を必然的・宿命的なものとするかのようなここでの分析？にはまったく同意できません。第一に、労働力需要の質的分化は、典型的には一九二〇年代頃にさかのぼる大量生産技術の導入以来のことであって、今にはじまったことではありません。第二に、にもかかわらず、日本を含む先進諸国において、これまでふつうの労働者は、「単純労働者」であつても正規雇用者として、職場に定着しキャリア展開を遂げていたし、またはそれができそうな職場内市民の立場を労働組合が確保させていたのです。ですから第三に、単純労働者の多くを非正規労働者にするのは、端的に言って、労働力の質的分化などではなく、先述の非正規労働者「活用」の効用を追求する企業の労務政策であり、それに抵抗できない労働組合規制の衰退にはかたまりません。そして第四に、仕事の種類と雇用形態とはますます不整合の領域を広げつつあります。いまや非正規労働者化は、単純労働者にかぎらず、専門職にも及んでいます。他方、正社員の資質はといえば、専門知識や創造的な能力というよりはむしろ、伝統的にはフレキシブルな適応力、加えて新たには、経営者的な企業財務の観点と営業目標をともかく達成しようとする「迫力」であつて、かならずしもハイテク技能ではありません。

本論に戻りましょう。もちろん全体として非正規労働者が増え続けるなかでは、この「不整合」は企業にとってモラルの点からある不便なところもありますから、たとえば、単純作業ではあつても基幹職務についている常用型パートタイマーのうちから下級管理職を選抜する（その場合でも「非正社員」身分は維持されています！）、改正派遣法に従つて一年または三年以上同じ職務についている派遣労働者は正社員にする（この法規制を逃れるため実にさまざまな便法が駆使されます！）——などの措置はたしかに見受けられるようになりました。とはいえ、非正規若年労働者の代表格ともいべきフリーターは、そしてフリーターを給源とする、臨時の雑業をなんでも引き受ける「下層」派遣労働者は、企業にとってはどこまでも、必要なら拾い、不必要になれば捨てる「手の力」、イギリスの文献にいうハンズ（hands）にすぎません。社員の採用試験でも、フリーター体験は決して有利な条件にはならないのです。

継続的なステイタスとしてのフリーター

それゆえ、学校から正規雇用へのトランジションに失敗して、あるいはこれもまた例外的では

ありませんが、なんらかの事情で正社員ステイタスを維持できずにひとたびフリーター（※）やニートになれば、次に「やっつけゆるゆる」職業に向けてのよほどの確固としたプランと手続きがなければ、今のところはあたかも蟻地獄に落ちたかのようです。たとえば、ニートの年齢構成の推移を手近な資料から計算しますと、一九九六年から二〇〇四年までの八年間にニートは一・六倍化しましたが、うち二〇代後半は一・九倍に、三〇代前半はちょうど二倍になっているのです（内閣府、二〇〇五年）。ニートの新規供給ばかりでなく、その長期化も推測されます。

（中略）

そしてもう一度、強調します。フリーターを中心とする若者非正規労働者のステイタスは、若者がそこにどんな主観的な意味を込めようとも、総じて経過的ではなく継続的であり、ときには生涯的でありうるかもしれません。そんな状況のもとでは、若者たちの多くが将来の展望を喪って落ち込んだり、とりあえず刹那的な遊びやお笑いに日を過ごしたりするのも、ある意味では当然でしょう。何年も「ハンズ」としてのフリーター生活を続ける若者のまじめさに、私はむしろある敬意を覚えます。

社会構造の点からみれば、正社員から人生コースを分断されたこのフリーター・「ハンズ」層の累積は、すでに述べたように世帯レベルの所得格差の拡大、若者の出身家庭の格差というものの役割増大と相互補強の関係をつよめながら、日本の勤労者のなかにおける階層格差の程度を大きくするとともに、これまでは「結果的」なものであった階層形成に「生得的」な色彩をも加えているのです。

〈熊沢誠著『若者が働くとき ―「使い捨てられ」も「燃えつき」もせず―』より〉

※ フリーターの誤植と考えられるが敢えて原文のまま表記した

5

問一 筆者が「今の非正規雇用者は、かつての臨時工とは違つ」と述べる理由として最も適切なものを選択し、記号で答えなさい。（4点）

- ア 非正規雇用者はかつての臨時工より高い賃金を得ているから
- イ 非正規雇用者は企業社会の外に置かれ続けるから
- ウ 臨時工は専門的知識を持っていなかったから
- エ 臨時工は企業にとって不要な存在だったから

問二 筆者が「単純労働者の多くを非正規労働者にする理由」として最も適切なものを選択し、記号で答えなさい。（4点）

- ア 労働者の能力が全般的に低下したから
- イ 労働力需要の質的分化が進んだから
- ウ 企業が非正規労働者を活用する効用を追求しているから
- エ 専門職の需要が減少し、若者の就労意欲が低下したから

問三 本文中で筆者が用いる「身分階層化」とは、どのような状態を指す語か。最も適切な説明を選択し、記号で答えなさい。(4点)

- ア 労働者が自由に職業を選べる状態
- イ 労働者が能力に応じて昇進する状態
- ウ 労働者が固定的な地位に分けられ、移動が困難になる状態
- エ 労働組合が強い影響力を持つ状態
- オ 非正規雇用が完全になくなる状態

問四 文中の「不整合」の意味として最も適切な説明を選択し、記号で答えなさい。(4点)

- ア 仕事の内容と雇用形態が一致していないこと
- イ 労働者の能力が不足していること
- ウ 労働組合の活動が不十分であること
- エ 企業の経営方針が不安定であること
- オ 非正規労働者が増えすぎていること

問五 山田の「希望格差」論では、企業が創造的労働者と単純労働者を質的に二分化し、それが正社員と非正規雇用の配置につながっているとされている。これに対して筆者はどのような理由から同意できないとしているのか。本文の説明を踏まえ、二つの理由を挙げて説明しなさい。(8点)

問六 『若者が働くともー「使い捨てられ」も「燃えつき」もせずー』は、二〇〇六年に発行されている。一方、左の表は、二〇二四年までの正規雇用労働者・非正規雇用労働者の人数を表している。左の表から、筆者の主張が現在も続いているといえるか、その根拠とともに説明しなさい。(8点)

※ 表は数値のみなので、筆者の主張が現在まで続いているとも続いていないとも解釈でき、どちらが正解というわけでない。表の数値と筆者の主張を読み取り、そこから導き出されることを根拠に自分の意見を述べること。

正規雇用労働者・非正規雇用労働者の推移 (単位:万人)

	正規雇用	非正規雇用
1984年	3,333	604
1989年	3,452	817
1994年	3,805	971
1999年	3,688	1,225
2004年	3,410	1,564
2009年	3,395	1,727
2014年	3,288	1,967
2019年	3,494	2,165
2024年	3,645	2,126

(「労働力調査」より作成)

三、以下の問いに答えなさい。(34点)

問一 次の一部のカタカナに当てはまる漢字をそれぞれア～オから選び、記号で答えなさい。(各1点、計10点)

① ニニでは現代の先々( )技術が使われている  
 ② 時にはものごとを( )純化して考えることも必要である  
 (ア単 イ短 ウ端 エ淡 オ担)

③ このお店では書籍を( )記している  
 ④ 君の行いは全員の模( )となる  
 (ア版 イ半 ウ判 エ範 オ販)

⑤ 近年、労働者の所得が( )上している  
 ⑥ 近年、物価が( )騰している  
 (ア公 イ高 ウ好 エ向 オ甲)

⑦ ( )( )規を使って直線を引く  
 ⑧ 君の( )( )識を疑う  
 (ア条 イ状 ウ常 エ情 オ定)

⑨ 写真の( )り方を習う  
 ⑩ ( )り扱い説明書を読む  
 (ア取 イ撮 ウ採 エ獲 オ録)

問二 次の語を漢字と送り仮名にしたとき、正しいものを選択し、記号で答えなさい(各1点、計6点)

- ① ニニろみ (ア 試み イ 試ろみ)      ② ちわる (ア 触る イ 触わる)  
 ③ はじまる (ア 始る イ 始まる)      ④ たずさわる (ア 携る イ 携わる)  
 ⑤ とどろもる (ア 滞る イ 滞もる)      ⑥ かんがめる (ア 鑑る イ 鑑める)

問三 次の語と最も近い意味になる語を選び、記号で答えなさい(各2点、計10点)

- ① 恣意 (ア 任意 イ 固執 ウ 独断 エ 善意 オ 落胆)  
 ② 頓挫 (ア 中断 イ 崩壊 ウ 破綻 エ 失脚 オ 断絶)  
 ③ 峻別 (ア 精査 イ 明断 ウ 選別 エ 排斥 オ 執着)  
 ④ 堅美 (ア 軽快 イ 着実 ウ 頑固 エ 健康 オ 終了)  
 ⑤ 沈思 (ア 熟考 イ 朗読 ウ 沈黙 エ 交渉 オ 落胆)

問四 次の四字熟語の意味を選び、記号で答えなさい(各2点、計8点)

- ① 藹藹問答
- ② 謹行無常
- ③ 百下百全
- ④ 蝸牛角上

ア 永久不変のものなりしこと  
イ 取るに足らぬ争い  
ウ 常に完全であること  
エ 囁め合はぬ会話のこと

**解答用紙**

受験番号

氏名

一	問一	a	( )				b			c			
		d					e						
	問二	①			②			③			④		
	問三	理由一											
	理由二												
問四													
問五													

二	問一			問二			問三			問四		
	問五											
問六												

三	問一	①		②		③		④		⑤	
		⑥		⑦		⑧		⑨		⑩	
	問二	①		②		③		④		⑤	
		⑥									
	問三	①		②		③		④		⑤	
		⑥									
	問四	①		②		③		④			
		⑥									

**解答例**

受験番号

氏名

一	問一	a	潔 (じ)	b	確執	c	はた
		d	はてんこう	e	瞬間		
	問二	①	ウ	②	オ	③	エ
						④	イ
	問三	<p>理由一 父親は老いてきているが、息子の前で老人のようにふるまうことを良しとしないから。</p> <p>理由二 息子も大人になったが、老いた父に対して尊大にふるまうのは気が引け、互いに遠慮や照れが生まれるから。</p>					
問四	<p>父親の話には発端・展開・オチ・結末があり、嘘も織り交ぜつつ巧みに構成されていて、短編小説のようにまとまりがよく、聞き手を飽きさせない魅力があったこと。</p>						
問五	イ						

二	問一	イ	問二	ウ	問三	ウ	問四	ア
	問五	<p>第一に、労働力需要の質的分化は大量生産技術が導入された1920年代から見られるもので、近年になって突然生じた現象ではないためである。第二に、先進諸国ではこれまで単純労働者であっても正規雇用として職場に定着し、労働組合もその地位を保障させてきたため、単純労働者が非正規化するのには質的分化の必然ではなく、企業の非正規活用政策と労働組合の弱体化によるものだからである。</p>						
問六	<p>表の数値から、2019～2024年にかけてだけは非正規雇用労働者が減少していることが分かる。筆者の主張にもとづけば企業が非正規労働者を増やしていると考えられるが、近年だけを見れば筆者の主張とは異なった特徴がみられる。しかし、依然として非正規率は高位を保っているのも事実であり、筆者が指摘する所得格差の拡大を是正するためには非正規率をさらに下げることが必要であると考ええる。</p>							

三											
問四	問三	問二		問一							
		①	⑥	①	⑥	①	⑥	①	⑥	①	⑥
①	②	③	④	⑤	⑥	⑦	⑧	⑨	⑩	⑪	⑫
エ	ア	イ	ウ	エ	オ	カ	ク	ケ	コ	サ	シ
②	③	④	⑤	⑥	⑦	⑧	⑨	⑩	⑪	⑫	
③	④	⑤	⑥	⑦	⑧	⑨	⑩	⑪	⑫		
④	⑤	⑥	⑦	⑧	⑨	⑩	⑪	⑫			
⑤	⑥	⑦	⑧	⑨	⑩	⑪	⑫				
⑥	⑦	⑧	⑨	⑩	⑪	⑫					
⑦	⑧	⑨	⑩	⑪	⑫						
⑧	⑨	⑩	⑪	⑫							
⑨	⑩	⑪	⑫								
⑩	⑪	⑫									
⑪	⑫										
⑫											

東京立正短期大学

二〇二六年度

第三回 一般選抜・一般選抜（スカラシップチャレンジ）入学試験

## 国語問題用紙

- 一 監督者の指示があるまで本冊子を開かないこと。
- 二 試験開始後、本冊子は必要に応じて切り離して構わない。
- 三 解答用紙に受験番号、氏名を記入すること。  
(試験監督者の指示に従って記入すること)
- 四 試験終了後、試験問題は回収します。解答用紙、問題冊子ともに提出すること。  
(商用利用・個人利用を問わず、入学者選抜問題の無断転載を禁ず)

## 一、次の文章を読み、後の問いに答えなさい。(34点)

邦枝と和子と美々子は、他人の目にはおそろくおなじくらい年をとった三人の女に見えるだろう。年齢は、邦枝が六十九、和子が五十二、美々子が五十だった。若い頃からあまり化粧をしなかった邦枝は、化粧をせずとも白く丈夫な肌が自慢で、背が高く痩せ型である上に姿勢がいいので、実年齢よりずっと若く見える。逆に和子はやや老けて見えた。黒いオーバーコートに黒い手袋、黒いブーツ、という全身黒づくめの恰好は、その方がすこし痩せて見えるかもしれないという浅はかな考えが殆ど癖になつてのことだったが、功を奏していなかった。美々子はといえば、かつてステューワーズをしていたという経歴をしのばせる華やかな外見ではあるが、いかんせん化粧も服装も派手すぎて、やや妖怪じみており、年齢不詳だが若くはないことはあきらかにわかった。そういうわけで、三人はおなじような年恰好に見えた。中年女性の中でも年上の部類、といったところだろう。

三人が会うのは久しぶりのことだった。待ち合わせは例年どおり、駅をでて右へ階段を下りた交番の前、だった。邦枝はバスで、和子は電車で、美々子はタクシーでそこにやってきた。曇つた、寒い日の正午だった。

「いやんなっちゃうわね。雪が降りそうじゃないの」

挨拶がわりに、邦枝はそう言つてムートンコートの衿をかき合わせた。

<sup>a</sup>なじみのフランス料理屋で昼食をとる。一年に一度の、三人の約束事だ。民家を改造したこの小さな店に、かつては三人ともよく来たものだったが、料理人も従業員も、その頃とはすっかり変わってしまった。

「えっ」

最近耳の遠くなり始めた邦枝は、料理の説明をするウェイトレスの声が聞きとれず、二度訊き返した。メニューは手元にあるのだし、形式的な説明など聞き流せばいいと考える人々もいるかもしれないが、この女たちは絶対にそれができない性質だった。

「いまこの人何て言ったの？」

邦枝が訊き、

「ママ、そんな言い方しちや感じが悪いわ」

と和子がたしなめる。

「だって、説明がわからなくちゃ注文の仕様がなくてしょう？」

そのとおりだわ、ときっぱり言うのは美々子で、美々子が説明をくり返す役をする。困るのは三人が揃つて笑い上戸である点で、いまのやりとりのあいだも、三人にとっては状況そのものが滑稽で可笑しく、揃つてくすくす笑っていた。

「だめよ、笑つたりしちや。どうして笑うの」

そう言いながら、和子も笑っている。

「いえね、あなたを笑っている訳じゃないのよ」

邦枝がウェイトレスに言う。ウェイトレスにしてみれば当然訳がわからず、ふきげんに、ただ立っているよりないのだった。

「世間で中年女が嫌われるのも道理ね」

「ほんとにそうね」

なおも笑いながら、三人はしやあしやあと言うのだった。

食事をしながら彼女たちが話すことといえば、「パパが生きていたころ」のことと、「最近の奇妙なこと」の二つだ。パパとは二十年も前に他界した邦枝の夫であり、和子と美々子の父親である。奇妙なこと、とは世の中の人間のふるまいおよび言葉遣いで、三人はそれに多大な関心を持っている。傍観者としての関心だ。

「こないだK駅でね」

たとえば和子はそう報告する。

「女子学生が二人で階段を降りながら、『電車早く来ないかな』『あ、こっち方面来るっぺー』って言ったの」

「来るっぺー？ それ方言なの？」

美々子が眉を持ち上げて訊いた。

「そう思うでしょ。それが違うのよ。『来るっばい』ってということなのよ、おそろくね、前後から考えると」

「へええ、驚くわね。最近はそんなふうにするの？」

「あきれるわね」

「あきれるでしょ」

三人は口々に言う。そもそも彼女たちは世の中を「奇妙な場所」だと考えていた。しかもそれは年々奇妙になっていく。邦枝にとっては夫の死から始まったことだった。和子と美々子にとっては、いつからともなく始まったことだった。いずれにしても、三人にとって、世の中はもはや自分たちの理解のおよばないものに思える。和子は会社に勤めているし、美々子は自宅で英語教室をひらいている。和子には夫がいるし、美々子は独身だが男と一緒に暮らしている。しかし、それらは自分と世の中との距離を、広げこそすれ縮めてはくれない。

食事がすみ、和子と美々子が二人で会計をした。

「さて。用意はいい？」

邦枝が母親らしく先頭に立ち、店を出ると三人は気をひきしめて、いよいよスーパーマーケットに乗り込む。

暮れの買い物、というのがこの日の名目なのだ。三人は決して吝嗇<sup>けち</sup>ではなかったが、普段は節約を心掛けている。ただし、一年に一度の、この日だけは例外なのだった。

かつてこの行事につきあわされた和子の夫は、三人の猛烈さに恐れをなして二度と参加しなくなった。そのとき夫が和子に言った言葉、「きみたちはまるでモンスターだ」は、三人のあいだで未だに語り草になっているのだが、彼を責めることはできないだろう。

なにしろ三人は「お正月だと思つて気分が高揚し」「こせこせしたくないし」「しばらくお店が閉まっちゃうから何か足りないものがあると大変だし」「なんだか嬉しくなっちゃうて」「自分でも何をカートに入れたんだかわからなくなる」ほど買い物をするのだ。しかもはしゃいでいてよく笑うので人目をひく。いちばんたくさん買うのは青物と果物だ。それは「豊かな気持ちになるから」だし「肉類はこの歳になるともうあまり食べたくないから」で、しかし「たんぱく質は大

事だから」無論肉や魚も買う。「冷凍しておけるから」幾つも。パンと卵と牛乳は、ひつじゆひんだし、普段食べないチーズやチョコレートもふいに欲しくなる。きれいな柄の紙ナフキンも。一人が一つずつ押すカートはたちまち一杯になる。

毎年のことながら和子と美々子が驚くのは、混雑した店内での邦枝の睨目すべき敏捷さで、ほんの「いつしゆん」目を離すと、二人共母親を見失ってしまう。やがて戻って来る邦枝は、たとえば缶入りのキャンデーを六つも持ち、これは買っておきなさい、と根拠のない自信にみちて言いながら、娘たちのカートに勝手にそれを放り込むのだ。和子と美々子は笑いだしてしまう。

そうかと思えば美々子が通路にしゃがみ込み、食器洗い洗剤の表示を熱心に読んで五分も動か  
なかつたりする。その姿を見て、邦枝と和子はまた笑う。

そうやって、彼女たちは買い物をする。二時間もかけて。賑やかに。ほとんど、力の限り。

おもてにでると、日はとつぷり暮れている。

「いやだ。暗くなっちゃったじゃないの」

邦枝が言い、約束があるかのように腕時計を見る。ずっと昔に、夫に贈られた腕時計を。

「ああ笑った。おもしろかった」

和子と美々子は口々に言い、「荷物が多くて他にどうしようもない」のでタクシー乗り場になら  
ぶ。

「いい一日だったわね」

「いい一年だったわね」

「来年もまた、愉しく暮らしましょうね」

他人の目にはおそろくおなじくらい年をとって見える、モンスターじみた三人の女たちは、それぞれ別のタクシーに乗り、別の場所に帰っていく。山のような食料を抱えて。世の中というこの奇妙な場所で、新しい年をまた一年生きのびるために。

〈江國香織著『物語のなかとそと』より〉

問一 太線部a～fの、a「なじ(み)」、b「滑稽」、c「ふまげん」、d「傍観者」、e「ひつじゆひん」、f「いつしゆん」を、漢字はひらがなに、ひらがなは漢字に書き改めなさい。(各1点、計6点)

問二 「浅はかな考えが始り癖になつての」のだが、功を養つていなかった。」とあるが、「」の語句の意味として最も適切なものを選びなさい。(4点)

ア 期待した効果が出ていなかった

イ 予想以上の成果を上げていた

ウ 他人の助けでやつと成功した

エ 努力の途中でやめてしまった

問三 冒頭の外見描写が果たす役割として最も適切なものを選びなさい。(4点)

- ア 三人の外見の差異を強調し、価値観の対立を予告するため。
- イ 外見の違いと「同じように見える」という他者の視線を対比し、主体と客体の入り示すため。
- ウ 三人の若い頃の記憶を喚起し、物語の時間軸を揺らがせるため。
- エ 年齢差を誇張し、それぞれが抱える若い人の恐怖を示すため。

問四 ウェイトレスとの場面から読み取れる三人の特徴として最も適切なものを選びなさい。(4点)

- ア 相手を論破しようとする、攻撃的な性格である。
- イ 緊張しやすく、初めての場所では無口になる。
- ウ 小ぢな行動も遣いも面白がり、互いに支え合つ性質がある。
- エ 相手の説明を理解できず、しばしば衝突を生む。

問五 本文では三人が世の中を「奇妙な場所」と感じる理由が語られる。三人が抱く違和感の本質を、彼女たちの年齢・生活環境・価値観の変化の観点から二二〇～二六〇字で説明しなさい。(8点)

問六 結びの「世の中という」奇妙な場所で、新しい年をまた一年生かすのびるために」は何を表しているか、次のなかから選びなさい。(4点)

- ア 三人が社会に対して恐怖心を抱き、家に閉じこもるようになっている。
- イ 困窮となりめず悲観しているが、来年こそは変わりたいという願望。
- ウ 世の中には怒りを覚えるつも、互いに支え合つて前向きに生活しようとしている意気。
- エ 社会に不満があり、来年は抗議活動を行おうとしている。

問七 本作における三人の関係性の描き方として最も適切なものを選びなさい。(4点)

- ア 互いの弱さを補い合つが、基本的には依存関係にあり脆さが目立つ。
- イ 外界を理解できず孤立した者同士が、閉じた関係を維持するために連携している。
- ウ 社会との距離を抱えながらも、互いを支え合つことで前向きに生かす力を確保する共同体として描かれている。
- エ 価値観の違いからしばしば対立し、関係が崩壊しつつある様子を描いている。

## 二、次の文章を読み、以下の問題に答えなさい。(38点)

### 記憶の中の老人

八十歳になった。子どものころに道で会った、ゆっくりあるいている年寄りを思い出す。その身ぶりに今の自分が似てくると、その人たちの気分もこちらに移ってくる。その人たちは一八四〇年ころに生まれた。黒船が来たときには、おどろいただろう。

ジョン万次郎は私の出会った人ではないが、私の記憶の中できわだった人である。十四歳の少年として舟に乗りこみ、予想外の嵐にあつて無人島に流され、アメリカの捕鯨船に助けられた。日本で小学校に行っていたわけではなく(小学校はまだなかった)、英語をどこかで習ったこともない。ただ、身ぶりで、自分たちは腹がへつているということを伝えた。

その身ぶりは伝わった。捕鯨船はひきとつてくれ、まず、食事をあたえられずに水だけをあたえられ、食事はすこしずつ、やわらかいものからかたいものにかわった。万次郎は、ずいぶんけちだと思つておこつたが、あとになって、これは、飢えた者に対する親切なあつかいだつたと感じて、船長に感謝するようになった。ながい航海の中で、船長は、万次郎にも手伝わせ、この十四歳の少年が思慮深いことを知った。そして、彼ひとり、アメリカ東部の自分の家につれてかえる。

そこで船長ホイットフィールドは、自分の属している教会に彼をつれてゆくと、牧師は、有色人種を受けいれない。船長は、この教会から離れることにし、次々に別の教会をたずね、最後に受けいれてくれるところをさがして、一家ともその教会の会員となった。この教会めぐりは、万次郎につよい印象をあたえた。日本に戻ってから万次郎が手紙を書くとき、彼は船長に「尊敬する友よ」と呼びかけている。命の恩人に対してこのように呼びかけることは、ひざまずいて感謝するのが船長の心にそぐわないと知っていたからである。平等という理想を彼はすでに身につけていた。

フェアヘイヴンで彼は学校に入り、同時に桶屋の修業をした。船の上で別にかせぎ仕事をして、ボートを買い、日本の近くで自分のボートを降ろしてもらつて故国に帰ることを、すでに心に期していた。

① 国政の転機をうながす個人が、                    時代の日本にはすでにあらわれている。

明治国家成立以前の万次郎の出現は、江戸時代の末に日本人が大きな未来をもつていたことを教える。一九〇五年に、政府と国民とが共々にいつわりの大国意識の網にとらえられるまで、日本人は一八五三年から一九〇五年まで、世界史の中で創造的な道を歩んだ。

### 学校という階梯

人間には、卒業しやすい型と卒業しにくい型とがある。

日本の知識人の大体は前のほうだが、たまにあとのほうがいる。私が親しみを感じる、というよりも、敬意をもつのは、あとの型の金子ふみ子である。

この人の伝記を、瀬戸内晴美は『余白の春』(中央公論社、一九七二年)に書いた。

金子ふみ子(一九〇四―二六)は、小学校にも続けていつていない。父は、女をつくつて家を

捨て、母は男を家にきそつて、娘が帰ってきてても家に入れない。ふみ子は、祖母をたよつて朝鮮に渡るが、そこでも**びんぼう**な親類として冷たいあしらいを受け、**②**日本人に低く見られている朝鮮人に親しみをもつた。この親しみは、日本に帰つてからもふみ子の支えとなり、ここで何人もの朝鮮人に友人を見出す。

なかには、日本が朝鮮をとつたということに対する不快感を、毎日顔面に表現しつづけている男がいて、彼に共感して一緒に暮らすことにした。彼の反感は、天皇に向けられる。日本が法治国であれば、なにかの行動を起こしたときに、あるいは行動を計画した証拠があるときに、はじめてつかまえるのが正当だろう。**③**、朴烈とふみ子とは、つかまえられて、死刑の判決を受ける。彼らの友人の批評によれば、朴烈は顔面表現によつて罰せられたのだという。

やがて、天皇の名で**大赦**が伝えられた。この知らせを受けたとき、金子ふみ子は、それをしりぞけた。もともと天皇暗殺への行動を起こした事実がないのだから、いまさら大赦を受ける理由はない。

彼女は自分の独房に戻つてから自殺した。今、この時、自分は王のゆるしをしりぞける勇気を持っている。しかし、この後に続く長い日常の時間に、おなじ勇気を保ちつづけることができるか。そうみずからに問う予測感覚をこの人は保っていた。

獄中で彼女の書いた記録『何が私をかうさせたか』(春秋社、一九三二年)は、今この時は、永遠の中に保たれるという直観をのべている。**④**、キエルケゴールの説いた永遠の粒子としての時間という直観と響きあう。

この人は、小学校、中学校、高等学校、大学という明治国家の工夫した学校の階梯を登らずに、自分の思想として、この直観をのべた。

小学校から中学校へと、自分の先生が唯一の正しい答えをもつと信じて、先生の心の中にある唯一の正しい答えを念写する方法に習熟する人は、優等生として絶えざる転向の常習犯となり、自分がそうあることを不思議と思わない。

万次郎と金子ふみ子とは、この学校の階梯を登ることなく、自分の経験を**ぎんみ**することから、それぞれの道をひらいた。

〈鶴見俊輔著『思い出袋』より〉

問一 太線部a～fの、a「捕鯨」、b「思慮」、c「ナニク」、d「びんぼう」、e「大赦」、f「ぎんみ」を、漢字はひらがなに、ひらがなは漢字に書き改めなさい。(各一点、計6点)

問二 ①～④に入る言葉として最も適切なものを、ア～オより選択し、記号で答えなさい。

※ ア～オのうち一つは使用しない。それ以外はすべて一度ずつ使用する。(各一点、計4点)

ア しかし      イ それは      ウ ニのよつに      エ むしろ      オ ちろん

問三 万次郎が「船長に感謝するようになった」理由として最も適切なものを選びなさい。(4点)

- ア 水しか与えられなかったことを深い屈辱として感じたから
- イ 捕鯨船の食事の質が悪く、日本食が恋しくなったから
- ウ 当初けちに見えた扱いが、実は飢えた者への配慮だと理解したから
- エ 捕鯨船での生活に不満を抱き、早く帰国したかったから

問四 万次郎が平等の理念を身につける契機となった出来事として、本文の説明に合致するものを選びなさい。(4点)

- ア 船長が万次郎のために特別な礼拝堂を建てたこと
- イ 教会が受け入れない場合、船長がその教会を離れ、受け入れる教会を探し続けたこと
- ウ 船長が万次郎に英語を厳しく教え込み、勉強に励ませたこと
- エ 万次郎が航海中に指導的立場を任せられ、同乗者を導いたこと

問五 金子かみ子が「大赦」を拒んだ行為の意味として最も適切なものを選びなさい。(4点)

- ア 将来的に再審を請求するために、あえて大赦を受けなかった
- イ 本来犯罪事実が存在しない以上、恩赦を受けることは理念的に矛盾すると判断した
- ウ 恩赦を受け入れると朴烈との関係が断絶すると考えた
- エ 恩赦は政治的意図の産物であり、その背後にある国家の思惑を暴くため

問六 筆者は「卒業しやすい型」と「卒業しにくい型」を対比して述べている。

この対比を通して筆者が伝えようとしている、「学校の階梯」と人間の精神形成の関係を、文章に即して90～110字で説明しなさい。(8点)

問七 筆者は、万次郎と金子かみ子という時代も背景も異なる人物に共通点を見いだしている。

筆者がこの二人を並置する意図を、文章全体の主張に触れながら100～130字で述べなさい。(8点)

三、以下の問いに答えなさい。(28点)

問一 次の一部のカタカナに当てはまる漢字をそれぞれア～オから選び、記号で答えなさい。(各1点、計10点)

- ① その決断は、彼のキヨウ固な価値観に基づくものだ。
- ② 市場におけるそのキヨウ争原理は、必ずしも社会全体の利益と一致しない。  
(ア強 イ狂 ウ競 エ協 オ経)
- ③ 哲学的議論においては、概念のケン討が最も基本的な作業である
- ④ 政策の是非について、専門家の間でケン解が大きく分かれる  
(ア研 イ見 ウ検 エ兼 オ権)
- ⑤ 新たな理論を構築するには、先行研究を批判的にコウ察する姿勢が欠かせない。
- ⑥ 彼らは新制度の不公平さを訴え、正式なコウ議書を提出した。  
(ア公 イ高 ウ交 エ考 オ抗)
- ⑦ 社会の変化を的確に捉えるには、日々の変化をカシ察する姿勢が重要だ。
- ⑧ 調査委員会は、企業の不正に対して厳格なカシ視を行った。  
(ア観 イ鑑 ウ勸 エ監 オ管)
- ⑨ 車が来ていないがどうか、サイ心の注意を払って歩道を渡った。
- ⑩ 委員会は複数の提案の中から、最も妥当な案をサイ択した。  
(ア細 イ最 ウ採 エ裁 オ際)

問二 次の語と最も近い意味になる語を選び、記号で答えなさい(各2点、計10点)

- ① 帰結 (ア 結論 イ 原因 ウ 推測 エ 出発 オ 兆候)
- ② 妥当 (ア 不当 イ 適切 ウ 過剰 エ 穏当 オ 無難)
- ③ 敏腕 (ア 無才 イ 達者 ウ 苦手 エ 無能 オ 能手)
- ④ 詭弁 (ア 正論 イ 明説 ウ 実証 エ 虚論 オ 論破)
- ⑤ 内包 (ア 含意 イ 除外 ウ 消去 エ 分離 オ 破壊)

問三 次の四字熟語の意味を選び、記号で答えなさい(各二点、計8点)

- ① 粉骨碎身
- ② 付和雷同
- ③ 支離滅裂
- ④ 荒唐無稽

ア 自分の意見がなく他人にまぐ回調すること

イ 理屈に合っても根拠がないこと

ウ ありこだけの努力を尽くすこと

エ 話や考えがばらばらでまじりまじりであること

解答用紙

受験番号

氏名

一		問一	a				
問六	問五	問二	d				
		問三	e				
問七		問四	f				
			c				

三			問一	問二	問三
①	②	③	④	⑤	⑥
⑦	⑧	⑨	⑩	⑪	⑫
⑬	⑭	⑮	⑯	⑰	⑱
⑲	⑳	㉑	㉒	㉓	㉔

二					
問七	問六	問三	問二	問一	
			①	d	a
		問四	②	e	b
			③		
		問五	④	f	c

**解答例**

受験番号

氏名

一	問一	a	馴染(み)	b	こけい	c	不機嫌	
		d	ぼっかんじゃ	e	必需品	f	一瞬	
	問二	ア		問三	イ		問四	ウ
	問五	<p>三人は年齢を重ねるにつれ、若者の言葉や行動が理解しにくくなり、社会の変化が自分たちの感覚とずれていくことを感じている。仕事や家庭という日常の生活環境を持ちながらも、それが社会との距離を縮めることにはつながらず、自分たちの価値観がもはや通用しない世界に身を置きつつ、その距離を傍観する感覚が「奇妙さ」の本質となっている。</p>						
	問六	ウ		問七	ウ			

二					
問七	問六	問三	問二	問一	
				d	a
<p>万次郎と金子ふみ子は、ともに学校の階梯を登らず、自分の経験を吟味してそれぞれの道をひらいた人物である。筆者がこの二人を並置するのは、時代や境遇が異なっても、既成の「唯一の正しい答え」に従わずに主体的に生きる姿勢こそが、人間の精神形成に本質的であることを示すためである。</p>		ウ	①	ウ	ほげい
		問四	②	e	b
		イ	エ	f	しりよ
			③		
		問五	④	c	鎖圍
		イ	イ	f	吟味

三		
問三	問二	問一
		①
①	①	①
ウ	ア	ア
①	②	②
ア	イ	ウ
③	③	③
エ	オ	ウ
④	④	④
イ	エ	イ
	⑤	⑤
	ア	エ
	ウ	ウ

**東京立正短期大学**  
**入学者選抜(一般選抜・「国語」)**  
**出題のねらい**

■ **高等学校学習指導要領の内容**

言葉による見方・考え方を働かせ、言語活動を通して、国語で的確に理解し効果的に表現する資質・能力。

■ **入学者選抜「国語」における問の概要**

異なる種類や分野の文章などを組み合わせた、複数の題材により、言語を手掛かりとしながら、文章から得られた情報を多面的・多角的な視点から解釈したり、目的や場面等に応じて文章を書いたりする力などを求める。

■ **主に問いたい資質・能力**

**知識・技能**

基礎的・基本的な知識・技能。また、それらを社会の様々な場面でバランスよく活用できる。

**思考力・判断力・表現力・主体性を持って多様な人々と協働して学ぶ姿勢**

必要な情報を知識・技能と適切に組み合わせ活用、および、適切に表現できる。